

水七景

小川未明

青空文庫

*

村から、町へ出る、途中に川がありました。子どもは、お母さんにつれられて、歩いていました。

橋をわたりかけると、子どもは、欄干につかまり川を見おろしました。水が、あとから、あとから、流れてきて、くいにぶつかっては、うずをまき、ジヨボン、ジヨボン、と、音をたてていました。子どもは、ふしぎそうに、それを見まもり、

「お母ちゃん、水が、なにかいっていますね。」と、いいました。

「早く、道草をとらんで、いらっしやいと、いつているですよ。」と、お母さんは、答えました。

「この水は、どこまでいくの。」

「そうですね、村や、町を通って、海へいくのですよ。」

二人は、話しながら、また、歩きだしました。岸の、ねこやなぎは、まだ赤いずきんをかぶって、ねていました。

*

今年の、遠足は、昔の、城あとを見にいくのでした。

ぼくたちは、田んぼの、小道を歩いて、森のある村を通り、そして、さびしい小山のふもとへ出ました。

そこが、城あとでありました。わずかにのこるものは、当時、とりでにつかつたという、青ごけのはえた、大きな石と、やぶにかくれた、池くらのものです。その池には人のいないとき、金の蔵が浮くという、いいつたえがありました。

「みなさん、池はあぶないから、気をつけるんですよ。」と先生は、いわれました。くまざさをわけて、下をのぞくと、水のおもてが、青黒く光って、それへ、まわりの木の枝から、たれさがる、むらさき色のふじの花が、美しいかげをうつしていました。

「ドボン。」と、どこかで、かえるのとびこむ音がしました。

*

ぼくたちの、泳ぎおよにいく川かわは、村むらの近くちかにありました。水みずが、いつもたくさんで、きれいでした。浅いあさところは、そこにうずまる、白いしろせとものや、青いあお石ころいしまですきとおつて見みえました。橋はしのところから、川下かわしもへいくにつれて、だんだん、深ふかくなりました。

くるみの木きのあるあたりが、いちばん深ふかくて、ぼくたちの背せは、立たちません。ここでは、よく大おおきなふなや、なまずなどが、つれました。

今年ことしも、いつしかたのしい、泳およぎの季節きせつとなりました。おばあさんが、

「きゆうりの、初はつなりを、水すい神じんさまにあげなさい。」と、おっしゃったので、ぼくは、畑はたけから、みごとにきゆうりを、もいできて、それへ、自分じぶんの名なを書かきました。そして、それを川かわへ流ながしにいきました。

ぼくは、ひさしぶりで、なつかしい川かわのおいをかぎました。水みずも、ぼくを見みて笑わらえば、太陽たいようまで、きら、きらと、よろこんで、歓かんげい迎むかひしてくれました。

*

地主は、縁側で、庭をながめながら、たばこをすっていました。そのとき、きたないふうをした、旅僧が、はいってきて、

「どうぞ、水を一ぱい、いただきたい。」と、もうしました。すると、地主は、つれなく、「この井戸の水は、金気があつて、のめない。どうぞ、よそへいきなされ。」と、ことわりしました。

旅僧は、そのまま、だまつて、木戸口を出ていきました。

旅僧は、こんど、村はずれの、小さな百姓家へはいつて、たのみました。

「おやすいことです。さあ、たくさんめしあがれ。」と、いつて、あるじは、わざわざ井戸から、つめたい水をくんでくれました。

僧は、よろこんで、お経をあげて、たちさりました。

それからというもの、どんなひでりつづきで、ほかの井戸が、かかれても、この家の井戸は、ご利益で、水のつきることは、なかつたといひます。

*

ある夜、わたしが、町を歩いてみると、広場の、くらがりには、人々があつまつて、なにか見ていました。

わたしも、そのそばへ近づくと、おじいさんが、大きな望遠鏡をすえつけて、お金をとって、月を見せているのでした。

「どうです、よく見えませんか。あの雲のようなのが、山脈で、ぼつ、ぼつが、噴火口のあとです。月の世界には、水がないから、生物もない。死んだ世界ですよ。」と、おじいさんは、説明しました。

「ああ、それで、月は水がみたいのか。」と、わたしは、思いました。

だから、どんな小さな水たまりにも、また、細い流れにも、月が、姿をうつしていました。

わたしが、町を出て、さびしい、小道をいくと、畑で、虫がなくなっていました。まだ、夜ふけともならぬのに、いもの葉に、もう露がおりていました。そして、その露の玉にも、やはり、月のかげが、やどっていました。

*

秋の、うららかな日でした。

畑から、とってきた菜の花を、母親は、前の小川で洗っていました。

少年は、そのそばに立って、見ていました。毎年、いまごろになると、どこの家でも、冬の用意に、菜をつけるのでした。

「まだ、なかなか。ぼく、おなかがすいた。」と、少年は、いいました。

「もう、ちつとがまんをおし、じき終わりますからね。そうしたら、はいつて、ご飯のしたくをします。」と、母親は、答えました。

日が、だんだんと、西へかたむいて、水の上が、かげりはじめました。

そのとき、川上から、新しい菜の葉が、流れてきました。

「お母さん、どこで、菜を洗っているんでしょうね。」

「さあ、どこの家でしようね。どこでも、このお天気うちに、菜をつけるんですよ。きつと、このあとは、雪がふりますからね。」

ふと、このとき、少年の頭に、ほかでも、こうして、母親をまっている、子どものあることが、うかびました。

*

庭先の、大きな水盤には、夏から、秋へかけて、まっかな、すいれんの花がさきました。

また、きんぎよと、めだかが、なかよく、泳いでいました。

そのころ、毎日、一ぴきのはちが、水をのみに、とんできました。はちは、すいれんの、まるい葉のまん中へ、おりました。それから、水にひたる、葉のふちまで歩きました。いつしか、秋が深くなると、すいれんの葉は、黒くくちて、水の底へしずみましました。また、はちも、どこへいったか、こなくなりましました。けれど、水盤の中では、あいかわらず、きんぎよと、めだかが、泳いでいました。

とうとう、こがらしのふく、季節となりましました。すると、水盤の水は、氷のように冷たかったのです。ある日、子どもは、魚たちを、かわいそうに思つて、小さな入れ物へうつし、あたたかな、自分のへやへもつてきました。しかし、冷たくとも、すみなれた場所のほうが、よかつたのか、一晩のうちに、いくひきか死んでしまいました。子どもは、

おどろいて、あとの魚^{さかな}たちを、ふたたび、水^{すい}盤^{ばん}の中^{なか}に、もどしました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「みどり色の時計」新子供社

1950（昭和25）年4月

初出：「童話読本」

1948（昭和23）年9月

※表題は底本では、「水《みず》七一景《けい》」となっています。

※初出時の表題は「水とこども」です。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2017年12月26日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

水七景

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>